学校教育実践学研究，2015，第21巻，143－161頁

大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究報告Ⅷ

深澤清治・小原友行・朝倉　淳・松浦武人・松宮奈賀子・岩下真也*
鵜木涼子*・小川征児*・小川麻貴*・加藤沙世子*・河上裕太*・久保田大貴*
黒田真吾*・砂田眞吾*・辻本成貴*・永井ほのり*・中村航平*・山本和央*
（2014年12月5日受理）

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary/Secondary Schools in the United States (Ⅷ)

Seiji FUKAZAWA, Tomoyuki KOBARA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA, Nagako MATSUMIYA, Shinya IWASHITA, Ryoko UNOKI, Seiji OGAWA, Maki OGAWA, Sayoko KATO, Yuta KAWAKAMI, Daiki KUBOTA, Shingo KURODA, Shingo SUNADA, Shigeki TSUJIMOTO, Honori NAGAI, Kohei NAKAMURA and Kazuo YAMAMOTO

Abstract. The present short paper reports on the 8th overseas teaching practicum in the United States by 13 graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center (GPSC) since 2006. The participating students were those majoring in elementary/secondary school education and they observed and also conducted lessons in English in six local public/private schools in North Carolina. The aim of this project was threefold: 1) to self-develop practical instructional competence by teaching pupils with different cultural backgrounds; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. Furthermore, the school project was followed by cross-cultural field study visits to NC State Capitol, Raleigh and the U.S. Capitol, Washington, D.C. Among the major achievements through this project was enhanced global awareness and classroom communication skills of the future teachers. It is hoped that this short but intensive experience in diverse school settings will broaden the Japanese students' personal horizons and confidence in teaching.

1　はじめに

「体験型海外教育実地研究」は，広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称はGPSC）が開発し企画・実施しているプログラム（2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目）であるが，本年度は第８回目の実施となる。本年度は，博士課程前期１年の大学院生13名【初等10名（内，現職社会人院生１名），中等３名】が参加して実施された。なお，全８回の参加者の合計は77名である。

この授業は前期の集中科目の位置づけであるが，実際は年間を通したプログラムとなっている。具体的に本年度は，４～８月の事前の教材研究，９月19日～29日の米国での教育実地研究（ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立のウォールコーツ小学校・エルムハースト小学校・C.M.エッペス中学校での教育実習とイーストカロライナ大学での日本語教育受講学生との交流，私立の幼小中一貫校であるセントピータース・カソリックスクールの施設・授業見学と児童・生徒との交流，州都ローリー市内のイクスプローリス小・中学校での８学年の生徒や校長との意見交換，ミュージアム・マグネット校のムーアスクエア中学校での授業見学や校長・教員との意見交流，そして博物館を中心とした教材調査，首都ワシントンＤＣでの多文化理解学習のための教材調査），そして帰国

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生

後の10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成，12月11日の成果発表会となっている。

なお，本年度も，７月５日に開催された「日米協働によるグローバル教員養成をめざして～６大学間コンソーシアム（西日本３大学・米国ＮＣ州３大学）の成果と展望～」をテーマとした第10回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった，実習校であるエルムハースト小学校のジル・ホワイト先生，エッペス中学校のジュリアン・カーター先生の協力を得て，７月６日に行われた授業研究ワークショップにおいて，事前の指導案検討を綿密に行った。そのこともあり，現地での授業実践がスムーズに行われ，大きな成果をあげることができた。

以下では，本年度の実地研究の概要，参加者の報告，評価について紹介していきたい。

2　2014年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1)　全体日程

2014年度，本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

４月８日（火）　2014年度「体験型海外教育実地研究」実施説明会
４月25日（金）　本授業の概要と計画説明
５月21日（水）　授業研究テーマ案の発表
６月５日（木）　学習指導案の検討(1)
６月10日（火）　学習指導案の検討(2)
６月23日（月）　学習指導案（英語版）の検討(1)
６月24日（火）　学習指導案（英語版）の検討(2)
７月５日（土）　第10回学校間交流国際フォーラム参加
７月６日（日）　2014年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
７月29日（火）　学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き(1)
７月30日（水）　学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き(2)
８月29日（金）　準備状況確認，渡航に関する書類提出，報告書・発表会について確認
９月13日（土）　渡航前最終打合せ
９月19日（金）～９月29日（月）　米国における「体験型海外教育実地研究」
12月11日（木）「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2)　現地での日程

９月19日（金）　広島出発，成田泊
９月20日（土）　成田出発，米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
９月21日（日）　授業準備および授業打合せ
９月22日（月）　グリーンビル現地学校訪問（観察，一部実習）
９月23日（火）　グリーンビル現地学校訪問（実習）
９月24日（水）　セントピータースカトリックスクール見学，グリーンビルからローリーへ移動
９月25日（木）　イクスプローリス中学校見学，ムーアスクエアミュージアムマグネット中学校見学
９月26日（金）ローリーからワシントンへ移動
９月27日（土）ワシントン研修
９月28日（日）ワシントン出発，機内泊
９月29日（月）広島到着

(3)　参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には，前述のとおり大学院生13名が参加した。なお，参加大学院生の渡航費用や滞在費はすべて自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置，担当者，参加者，引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムハースト小学校（K-5)】
実施校担当者：ジル・ホワイト先生
参加者：永井ほのり・黒田真吾・鵜木涼子・小川麻貴・辻本成貴
引率者：朝倉淳・松宮奈賀子

【ウォールコーツ小学校（K-5)】
実施校担当者：シンディー・ワトソン先生
参加者：加藤沙世子・河上裕太・砂田眞吾・山本和央・久保田大貴
引率者：小原友行・松浦武人

【C.M.エッペス中学校（6-8)】
実施校担当者：ジュリアン・カーター先生
参加者：中村航平・小川征児・岩下真也
引率者：深澤清治

3　参加者の報告

参加者（15名）は，各校において実践した授業に関する「ねらい」，「概要」，「成果と課題」および授業の準備から実践を通した「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

第１学年　異文化理解“Let's feel Cool in Summer!!”

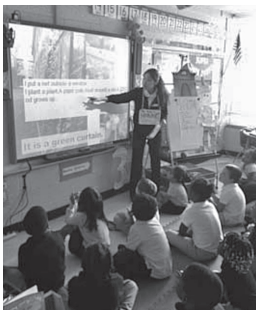
教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　永　井　ほのり

１　ねらい

本授業は，アメリカの子どもたちが，日本という離れた国の気候や暮らしの工夫を知り，さらに自らの生活と比較して，気候と暮らしのかかわりに対する考えの広げることをねらいとした。また，このような価値的なねらいに加え、授業そのものや授業者に興味を持たせることを通して，日本の文化に対する興味を持たせる，という態度面のねらいもあった。

日本の夏の暑さ対策には，実際に温度を下げる方法と，見た目や音から涼しさを感じさせる方法とがある。今回はそれらの方法を，アメリカの小学１年生に二択クイズを通して紹介した。また，どちらの要素も兼ね備えた暑さ対策の方法として，「緑のカーテン」を紹介することとした。

２　概要



⑴　導入では，授業と授業者に興味を持ってもらうために，授業者が日本からグリーンビルにやって来た経路について紹介を行った。

⑵　展開では，日本の夏の暑さ対策にどのようなものがあるのかを知ってもらうために，暑さ対策の特徴をクイズ形式で紹介を行った。

例）赤色のカーテンと緑色のカーテンの写真を見せ，どちらが涼しそうかを聞く。

例）風鈴と御堂の鐘の写真を見せ，どちらが涼しげな音がするかを聞く。

⑶　総括では、「緑のカーテン」という暑さ対策が，温度と感覚との両方に働きかける方法であることを絵本と言葉とで説明する。

３　成果と課題

本授業の成果は，本授業において多くの子どもに興味を持たせることができた点である。私が風鈴や折り紙で作った朝顔を取り出し，触ってごらんと言うと，子どもたちからは驚きの声が上がった。子どもたちは好奇心や驚きを伴って日本文化に触れることができた，と言えるのではないだろうか。

本授業の課題は，クイズという活動と「緑のカーテン」を紹介するという授業の目的が，うまく接続していなかった点である。とくに反省すべきは，第一学年の子どもたちに理解してもらえるようなわかりやすいことばで，「緑のカーテン」とはどんなものかを説明することができなかったことである。それは場所がアメリカだとか，使用言語が英語だとかいう以前に，子どもの発達段階に合わせた授業づくりができていなかったということである。問題は，授業全体に影響を与えるほどの決定的な準備不足であった。この点についてはこれからの授業づくりの課題と言える。

【自己の変容】

私にとって，今回の体験型海外実地研修が初めての海外体験だった。研修のなかで，グローバルマインドという語を何度も聞き，その意味について考えた。アメリカでは，授業をさせていただいた学校や訪問先の学校で現地の先生方のあたたかい気づかいに触れた。その中で私が感じたのは，グローバルマインドは，なにも海外でだけ必要な心構えではないということであった。相手の言っていることが聞き取れなければただ素直に聞き返すことであり，まずは相手をしっかりと見て，かかわろうとすることである。それは、誰に対しても実践できることである。

第１学年　音楽“What's this sound? ―― sound in Japan and America ――”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　加　藤　沙世子

１　ねらい

「サウンドカード（音のかるた）」で遊んだり「サウンドカード」をつくったりする活動を通して，日本特有の音に親しむと同時に，身のまわりの音への関心を深める。

２　概要

⑴ 「富士山」「すし」などの写真をスライドで紹介しながら，自己紹介を行った。

⑵ 「日本の音のプレゼント」として，寺の鐘の音や，ししおどしの音を聞く活動を行った。

⑶ ねこの鳴き声，かみなり，時計の三つの音を聞き，それぞれ何の音かあてるクイズを行った。わかりやすかったようで，子どもたちはすぐに答えを当てた。

⑷ 4，5人を1グループとして5グループに分かれ，サウンドカードゲーム（音がなったらその音に合うカードを取る，かるたのようなもの）で遊んだ。子どもたちは音が聞こえた瞬間にカードを取り合って楽しそうにしていた。異なるカードを取った友だちに対して「今のは○○の音だよ」と指摘し合う姿も見られた。

⑸ 自分たちの身のまわりには様々な音があるということを確認し，「学校」「家」「外」でそれぞれどんな音が聞こえるか考えた。「アメリカにも日本にも音はあるし，どこでも音は聞こえる」と言うと，「everything」というある子どもの呟きを耳にし，全てのものはそれを使って，またはそれ自体が音を出すことができるということを子どもなりに捉えているのだと感じた。

⑹ 白紙のサウンドカードに絵（音が鳴るもの，音を出すもの）をかき，一人一枚ずつサウンドカードを作成した。描きたいものはあるが絵を描くには難しいものをどうするか悩んでいる子どもがいて，活動の難しさを感じた。交流の時間はとることができず，作成したカードを回収して授業を終えた。

３　成果と課題

成果は，児童がお寺の鐘の音やししおどしの音など，普段アメリカではあまり聞くことがない音に親しむことができたということである。特に前述の二つの音については，授業の前半とサウンドカードゲームの両方で取り扱ったことによって，ゲームで音が流れたときにもすぐに児童は正しいサウンドカードを取り当てることができていた。

反省点は，児童の発達段階の考慮が不充分であった点である。今回授業を行った第１学年の児童はまだ小学校に入学したばかりの時期であり，サウンドカードに字を書き，しかも絵を描くという活動はかなり児童にとって難しい活動であったと考えられる。現地の子どもにとって授業を行う時期はどのような時期かということを踏まえ，活動を考えるべきだった。

【自己の変容】

授業を考えることを通して，音にも文化が反映されるということを知った。普段何気なく聞いている音でも，それは日本でしか聞けない音なのかもしれないと考えることで，自分にとっても音に対する価値観が変わったように思われる。また，現地での授業見学を通して，授業や学校の形態は一つではなく，多様なものであるということを学び，教育観が大きく変わった。例えば子どもたちの半分が算数の授業を受けている間もう半分は国語の授業を受けているというように，一斉授業に限らない授業形態が見られたのが興味深かった。日本以外の国の授業形態や教育制度についても知ることで，自分の教育的視野をもっと広げていきたい。

第２学年　異文化理解“Let's enjoy Japanese festival‘Matsuri’”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　黒　田　真　吾

１　ねらい

本授業では，以下の3点をねらいとして実践を行った。

・日本の特徴的な祭の文化に興味を持たせることができるようにする。

・祭体験を楽しむことが出来るようにする。

・祭に込められた人々の思いや願いに気づくことが出来るようにする。

２　概要

⑴　スライドを用いながら自己紹介をし，さらに祭への学習の導入としてつながるように，日本についてや祭についてのクイズを行う。児童の不安や抵抗感を軽減する目的で，この授業を通して活動を楽しみながら行うことが大切であることを導入の際に伝える。また，日本の特徴的な祭（灘のけんか祭やねぶた祭，なまはげ、祇園祭）の映像を見せながら紹介し，日本の子どもたちが祭や神輿 (手作り神輿) の練り歩きを楽しんでいる様子も映像で紹介する。

⑵　事前に現地の先生から頂いた Greenville で行われている祭の写真を用いて，アップステート・シェイクスピア祭や Pirate Fest といった地域性の強い祭，Watermelon Festival という食に関わる祭などといった Greenville の様々な祭にも目を向けることによって，日本とアメリカのそれぞれの独自性やよさに気づくことができるように仕向ける。また，祭を行う目的について考えていく中で，祭には人々の様々な思いや願いが込められていることに気付かせ，Greenville で行われている祭にはどのような思いや意味が込められているのか考える。

⑶　本時の最後の活動で行う祭体験に目的を持たせるため，自分自身や自分たちのクラスへの思いや願いをメッセージカードに書き，カードを神輿に貼り付ける活動を行う。

また，実際に法被を着て，祭囃子の音を流しながら神輿を担いで教室内を練り歩く体験をとおして，日本の祭の雰囲気を楽しむことができるようにする。

３　成果と課題

本実践において，児童に達成してもらいたいと考えた3つのねらいに関しては，授業観察やワークシートの記入状況を見ていておおむね達成することが出来たように感じた。特に，日本人としてアメリカの子どもたちに伝えたかったこととして，「①行事に楽しんで参加することや祭には人々の願いや思いが込められているといった日米の共通している点，②日本独自の特徴的な祭の文化体験や，アメリカ (Greenville) ならではの祭の様子といった日本とアメリカで違っている点」の2点を設定していたが，児童は自分たちなりに理解しようとしながら活動に取り組んでいたと授業実践を行いながら感じた。

課題としては，たくさんあるなかでも特に想定外の電子機器等の不具合もあり，日本の祭文化に関する説明がほぼ口頭になり，他の手立ても準備していればもっと分かりやすく伝えられたのではないかという点と，子どもたち同士でもっと話し合う場を設定していれば，本授業をとおして全員が考えたことや意見を口にする機会を与えられたのではないかという2点がよりよい実践へ向けた改善点であると思う。

【自己の変容】

私が海外を訪れるのは今回が初めてであったため，自己表現の方法に大きな違いを感じた。はっきり自分自身の意見や考えを示すことの重要性を、体験を通して感じることができ，私自身の自己表現や日本人の自己表現を見直すきっかけとなったように思う。

第２学年　異文化理解“Let's play in the suibokuga.”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　河　上　裕　太

１　ねらい

本授業では，以下の3点をねらいとして実践を行った。

・水墨画に対する、日本人の鑑賞方法を伝える。

・水墨画をイメージの世界で楽しむことができる。

・自分と他人のイメージの違いを認識する。

２　概要

⑴　スライドを用いながら自己紹介をし，水墨画への学習に導入としてつながるように，画材である墨の説明や、実物（コピー）の提示を行う。

⑵　水墨画の一部を鑑賞して、左右にどのようなモチーフが登場するかを想像することが、本授業の主な活動である。水墨画の左右を想像するための工夫として、まずは提示されている一部分にどのような景色が描かれているかという発問をし、児童とのコミュニケーションも兼ねて、水墨画を詳細に観察していく。その後に、水墨画の左右を想像する活動をして、想像し、左右に続いてゆく水墨画を明らかにしていく（実物の提示を想像の後に行う）。

⑶　先の活動を受けて、別の水墨画を渡し、その水墨画の中で、どんな人が住んでいるかや、その土地にどんな文化があるかなどを想像し、水墨画の中から「お話」を取り出す活動をする。本授業の中で培った鑑賞方法を別の水墨画でも使用できるかという練習をここで行っている。まずは個人で「お話」を創作した後に全体で交流し、同じ水墨画を鑑賞しても違う視点で水墨画を鑑賞しているクラスメイトを認識できるような流れを構築している。

３　成果と課題

本実践において，児童に達成してもらいたいと考えた3つのねらいに関しては，授業観察やワークシートの記入状況を見ていておおむね達成することが出来たように感じた。特に「水墨画をイメージの世界で楽しむことができる」というねらいに関しては、児童たちの活発な活動を引き出すことができたという点で成果に数えることができると考えられる。

一番の課題は英語でのコミュニケーション能力である。筆者の英語運用能力が足りなかったため、T.T として授業を助けてくださった Taylar 先生に頼ってしまう部分が多くあった。英語を聞き取る力、そして相手に質問する力は事前の努力が足りなかったことを反省している。授業に関する課題も共通していて、授業中のコミュニケーションが円滑に行えなかったことで、授業の進行や、活動の停滞に繋がったと思われる（Taylar 先生のおかげで授業自体は上手く流れたが）。

【自己の変容】

筆者は自分に自信をもっていたが、アメリカでの授業を通して、ネガティブに反省する力の重要性を再認識させられた。授業をポジティブに検討することも可能だが、今回に限っては、ネガティブに反省した方が筆者自身得るものが大きかった。この経験から、自己の実践、または研究に関してネガティブに反省することの有用性を学ぶことができたと感じている。

また、外国人としゃべることに関する抵抗感が減った、ということも自己の変容として挙げられる。話し手の言語運用能力が低くとも、聞き手の聞く態度によって、伝わったり伝わらなかったりする体験を数多く経験した。また、伝えようとする意識を高く持って、言語だけでなく、非言語でも相手に伝えていく姿勢がコミュニケーションを生むことも多かった。これらは、新しいコミュニケーション観の獲得として、自己の変容に繋がった。

第３学年　異文化理解“Let’s make New Holiday in Greenville!”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　鵜　木　涼　子

１　ねらい

本授業においては，大きく以下の2つをねらいとして設定した。

⑴　日本の文化と自国の文化に興味をもつこと。

⑵　日本とアメリカの祝日について，似ている点と異なる点に気づくこと。

２　概要

⑴　授業の導入として，日本の行事についての絵本『Annual　Events　in　Japan』の読み聞かせをした。絵本を読みながら，日本の祝日のうち大晦日など有名なものをいくつか紹介した。

⑵　アメリカと日本の祝日について比較したクイズを行い，祝日についての意識を持たせるとともにそれぞれの国の祝日における相違点や共通点について理解できるようにした。

⑶　日本には2016年から新しい祝日ができることを伝え，グリーンビルに新しい祝日を作れるとしたらどのような祝日を作るか考えるという活動をした。作った祝日については，どのようなことをする日なのか，文章や絵によってワークシートで説明し，最後に学級内で交流した。

３　成果と課題

本授業の成果としては，以下の二点が挙げられる。一点目は，本授業が子どもたちにとって日本の祝日や自国の祝日について考えるきっかけとなったことである。担当させていただいた学級の担任の先生によると，他国の祝日についてはもちろん，アメリカの祝日についても考える機会は多くはない上に，他国と比較できるような機会はほとんどないということだった。そのため，今回の授業をきっかけに自国・他国の祝日について考えることができたのは一つの成果であったと考える。

二点目は，本授業において創造的活動を取り入れたことである。自国や他国の祝日について考え，それぞれの子どもたちがオリジナルの祝日を考えたことで，新しく知識を増やすだけにとどまらず，祝日に対する子どもたちの思考を深めることができたと考える。子どもたちが意欲的に新しい祝日を考えてくれたため，子どもたちと一緒に授業を作っていくことができた。

また，本授業の課題としては以下の二点が挙げられる。まず一点目は，祝日を通してそれぞれの国の文化についてまで意識できるような授業の構成になっていなかったことである。お互いの国の祝日について考えることはできても，祝日や行事には文化が表れているということまで子どもたちにうまく伝えることができなかった。

二点目は，子どもの実態に合わせて臨機応変に対応できなかったことである。授業構成を考える段階で，本授業の最後の活動である意見交流の方法を計画していたが，実際には子どもたちが授業者の想像以上に発表に意欲的であった。結局ほとんどの子どもに発表をしてもらう形になったため，計画通りではなくても，実態にあわせてより効果的な方法をとるべきであったと考える。

【自己の変容】

実際に授業をしながら，自分自身が子どもたちと共に授業を作っていくことに対してとても楽しめていることを実感することができた。今回の経験は，これから自分が本当にしたいと思っていることについて考える一つのきっかけとなった。

また，私は自身の英語力に自信が無く，これまでの生活においてもできるだけ英語を使わずにすむようにしてきていた。しかし，本授業を通して，「相手が伝えようとしてくれていることを自分の力で理解したい」「自分の思いをできる限り伝えたい」という思いが強くなった。このように意識が変容したことで，英語を使っての会話を楽しむことができるようになった。

第３学年　図画工作科“Let's make the Japanese paper lampshade!”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　砂　田　眞　吾

１　ねらい

本授業でのねらいは，以下の２点である。

①　和紙を用いたランプシェード作りを楽しむ。

②　和紙を用いたランプシェード作りを通して，日本の紙や生活文化の特徴に触れる。

２　概要

⑴　導入ではスライドショーを用いて自己紹介を行い，続けて日本の生活風景の場面から Japanese window として障子についての紹介を行った。具体的には何度でも貼りなおせる障子の利点や，障子を通して見える光の幻想的な透け方について説明した。

⑵　障子に使われている和紙（障子紙）について説明した後は，千代紙や折り紙，花紙などを提示していき，日本には様々な紙があることを伝えた。

⑶　次に本授業では，和紙の光の透け方を活かしたランプシェード作りをすることを，教師が作った実物を提示しながら伝えた。実物を提示したことで，児童もどのようなものを作るのか見通しが持てたようだった。

⑷　その後，和紙ランプシェードの原型を児童に配布し，先ほど紹介した花紙を用いてランプシェードの飾り付けを行っていくことを伝えた。花紙（３色）を使った表現については，実際に和紙に貼るところを見せながら色の重なりによって様々な色ができることを伝えた。

⑸　花紙を切り取り、和紙ランプシェードに貼っていく活動では，個人個人に対応しながら進めていった。一人ひとりの児童が，思い思いに表したいものを表そうとしていた。

⑹　作品が出来上がる時間になると，LED ライトを配布し，花紙で飾り付けをした和紙ランプシェードを光らせ，それぞれ作った作品の出来栄えを味わった。

⑺　最後に，日本ではこの幻想的な明かりを囲んで家族団らんをすることを紹介し，家庭での実践を促して授業のまとめとした。

３　成果と課題

本実践における成果は，和紙を用いたランプシェードを作るという活動の中で，児童の活発な活動が見られたことである。LED ライトで自分の作品を光らせたときの楽しそうにしている児童らの様子が印象深い。児童一人ひとりの手元に作品が残り，それらがそのままお土産になったことも良かった。本実践で学んだことを思い出すきっかけになってくれればと思う。

課題としては，授業者が個々の児童とコミュニケーションをしようとするあまり，全体を見た声かけが全くできていなかったことである。指示や発問において，担任の先生に助けていただく場面が多々あった。全体としての流れを授業の中でしっかりと掴んでおくことは，授業を行う授業者にとって重要なことであるので，この反省をもとに次の実践に繋げていきたい。

【自己の変容】

アメリカでは授業中だけでなく，日常生活の中でも言葉が通じない場面が多くあった。日本における普段の自分であれば，伝えることを早々に諦めるところであったが，アメリカにおいては伝わらないことが普通という意識でいたため，何とかして伝えようと色々な手法で何度もトライすることができた。その経験から，自分なりの表現で人と繋がろうとする姿勢が身についたように感じる。10日間という短い期間であり，授業に関してはたった40分という限られた時間であったが，海外の方々と繋がる貴重な経験をすることができた。

第４学年　理科 “ Let’s make the toy using water, the ‘Cartesian diver’ ”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　小　川　麻　貴

１　ねらい

国も自然も文化も全く違う環境の中で，同じ内容の単元をアメリカの子どもたちはどう受け止めているのか，実際に授業をし，確かめてきたいと考えた。授業は，現在研究を続けている理科で，研究の対象として焦点を当てている「水」単元とし，教材として「浮沈子」を扱うこととした。「浮沈子」は「空気は圧し縮められるが水（液体）は圧し縮められない」性質を利用したおもちゃである。日本のお弁当に使われる「醤油入れ」を使って「浮沈子」を作り遊ぶ体験を通して，日本の文化や水に対する興味を喚起し，「浮沈子」の原理や身近に利用されている水の性質について気づく授業を展開することにした。また，理科授業におけるアメリカの子どもたちの反応や授業における変容を把握したいと考えた。

２　概要

⑴　日本とアメリカの弁当を比較するクイズ活動を行った後，弁当の中に入っている「醤油入れ」について紹介した。その後，ワークシートに「水」に対して今持っている考えを記入させた。→水に対して「泳いだりお風呂で使ったりする」，「飲むもの」といった考えを持っていた。

⑵「人の言葉通りに浮き沈みする浮沈子」を演示することで，なぜ「魚」が浮いたり沈んだりするのか疑問を持ちながら，作ってみたいという意欲を持たせた。その後，本時の課題「水を使ったおもちゃ『浮沈子』を作ろう」を提示した。

⑶「浮沈子」の作り方についてパワーポイントを使って説明した後，1人2個ずつ「魚」を使って「浮沈子」を作成し，遊ばせる時間を十分に確保した。

⑷　水に関する演示実験（①浮力の実験②圧力によって水や空気の体積が変化するかどうかを確かめる実験③パスカルの原理を実感するための実験と水圧油圧を利用した道具の紹介）を行った後，「浮沈子」で遊ぶ活動や実験を通じて気づいたことをワークシートに記入させた。→「（水の性質は）まるで魔法のようだ」，「水は圧し縮めることができないことがわかった」，「It was amazing. I had so much fun with you and this experiment.」などの記述があった。

３　成果と課題

授業中，授業後の子どもたちの様子やワークシートの記述内容の変容の様子から，「浮沈子」の作成・遊びを通して水の性質について考える理科授業が，アメリカの子どもたちにも有効であることを実践により確かめることができた。初めは単純に水の利用方法などしか考えることができなかった子どもたちも，授業を通じて水の性質に着目し，現象を説明しようとするようになった。日米を問わず子どもたちにとって，自らの手を動かしながら試行錯誤していく体験や日常生活との関連から自然事象を捉えなおす経験がいかに大切かということを再認識した。なお，子どもたちの細かな気付きや疑問を授業中とりあげたり解決するまで議論したりすることについては言語的に難しかったため課題が残る。授業における言語活動は子どもの思考を促すのに重要であるため，場面に合った適切な言語の使用や活用する場の設定を大切にしたい。

【自己の変容】

お互いの意思疎通を図るためにお互いの言語を知ることはもちろん重要であるが，相手を尊重する態度と，伝えたいと思う側に相手が聞きたいと思う内容があれば，話を聞こうとしたり理解しようとしたりするものだということを実感した。

今後自分自身にできることは，相手を知り，相手の言語を知ることだと思う。そして，自分自身の研究や仕事などを真剣に楽しみ，またいつか出会う人たちと心から交流できる自分に成長させていきたい。

第４学年　異文化理解“ Let's express with one word! ”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　山　本　和　央

１　ねらい

私がこの単元を取り上げた理由は，漢字という児童が今まで見たことのない文字に出会う場面をつくることで，日本の歴史や文化に興味をもつきっかけとなるのではないかと考えたからである。

２　概要

⑴　初めの挨拶で声を出させて，明るい雰囲気づくりを行った。

⑵　自己紹介として，自分の名前が英語・平仮名・片仮名・漢字の四つの文字で表すことができることを伝え，漢字についての説明を行っていく。

⑶　今年の漢字の行事を紹介し，実際の動画を見せた。

⑷「新」,「暑」という漢字が選ばれた背景とその理由を三択のクイズ形式で行った。

⑸　白紙と漢字を載せている紙と筆ペンを配布し，各児童が筆ペンを使って漢字を書き親しむ時間をつくった。

⑹　英単語一語で新学年の目標を表現するという活動を伝えた後に，日本の児童が自らの目標を漢字一字で表現した画像及び動画を見せ，それぞれの児童が選んだ漢字の理由を説明し，実際に各児童に新学年の目標を書いてもらった。

⑺　残り時間との兼ね合いから，何名かの児童にみんなの前で自分の目標とその理由を発表させて全体での交流を図った。

⑻　筆ペンがプレゼントであることを伝え，授業を終了した。

３　成果と課題

本実践の成果は，すべての児童が一つ一つの活動をしっかりと把握しながら意欲的に授業に参加できたことである。また，最初の挨拶での雰囲気づくりや三択クイズ等も授業を進めていくうえで有効なものとなった。私の予想以上に児童の漢字に対する興味・関心が高く，授業後にすべての児童が漢字のサインを書いてほしいと言っていたり，自分の名前を漢字で書いてほしいと言っていたりしており，文字の力を感じた。四年生の目標を英単語一語で表現する活動では，各児童が思いをもってしっかりと表現できていた。しかし，課題として，活動の説明や活動間の切り替えの部分などで，担任の先生に多くのフォローをしていただき，自らの英語力の不足を痛感した。

図２　英単語一語で目標を書く児童

【自己の変容】

体験型海外教育実地研究を通して，多くの貴重な経験をつむことができた。授業を行わせていただいた中で改めて感じたことは，準備の大切さについてである。パソコンやパワーポイントの動作確認，パワーポイントの中の英語表現に誤りがないか，授業内容のしっかりとしたイメージをもつこと，機器の不具合が起こったときのために二の手，三の手を考えておくことなど，しっかりとした準備をして授業に臨むことができたので，全体的に余裕をもって授業を行うことができた。私は教職高度化プログラムに所属しており，アクション・リサーチ実習を前期に行わせていただいたが，しっかりとした準備で臨むことができず目の前のことでいっぱいになってしまった経験があった。今回改めて感じた準備の大切さを意識して，後期の実習に取り組みたいと思う。

第５学年　異文化理解“Let's play the Japanese KARUTA game !”

教育学研究科　科学文化教育学専攻　社会認識教育学専修　　辻　本　成　貴

１　ねらい

授業を通して、子どもたちは次のことが達成できる。

・日本の伝統的な遊び道具であるカルタについて理解する。

・カルタを作り、カルタを使って遊ぶ。

２　概要

⑴　授業の導入として，広島県にある厳島神社の鳥居の絵をカルタにしたものを見せた。

⑵　カルタとはどのようなものかを，スライドを用いて説明した。筆者が作成したカルタをスライドに示し，視覚的に理解するようにした。

⑶　子どもたちに白紙の取り札を配り，カルタの絵を描いてもらった。

⑷　カルタで遊ぶ活動を行うために，カルタの遊び方を説明した。実際にカルタで遊んでいる人（同研究室の院生）の写真をスライドに写すことで直感的に理解できるようにした。

図　授業実践の様子

⑸　子どもたちが実際にカルタを遊ぶ時間を設けた。

多くの子どもがゲームに熱中して楽しめていた。子どもたちは読み札に対応していない札を叩くことも多かったが，ルールをちゃんと理解していたため、子どもたちはルールを守ってゲームしていた。

⑹　カルタが言語教育，郷土教育を，遊びを通して行えるものと伝え，授業をまとめた。

３　成果と課題

本単元の意義として次の３点をあげる。

第１に子どもたちがカルタの面白さを通して，カルタの意義について理解できたことである。

第２に日本の伝統的な道具であるカルタの作り方と遊び方を理解し，子ども同士でルールの教えあいを行い，カルタについて子どもたちが相互に学びを深めたことである。

第３に読み札を英語のことわざにしたことで，子どもが英語のことわざについて，他者に説明するための図を描くという表現活動を行ったことである。

一方本単元の課題として１点あげる。カルタの取り札を描く活動で，子どもたちがなぜそのような絵を描いたのか，子どもから聞くことが十分にできなかったことである。

【自己の変容】

米国の授業風景と日本の授業風景の間にある差異を実感し、以下の点を自らの授業に取り入れたい。

第１に授業へのアクティビティの導入である。子どもが学習課題に切実性をもって取り組んだり，子どもの深い思考を促したりする学習課題とアクティビティの設定は重要である。

第２に説明の方法の多様化である。なるべく子どもが説明や指示を理解することのできるように，図や動画を用いることで，１つの説明の仕方に偏らず複数の説明へと方法を多様化することが重要である。

第３に授業のテーマの設定である。例えば社会で積極的に行動してゆける能力や社会問題に対する判断力の育成をめざすならば，教師主導の説明型の授業だけでなく子どもが社会で行動したり議論したりする学習が必要である。

また米国での生活を通して、自分の考えや意思を積極的に伝えてゆく工夫や努力の必要性を理解した。

第５学年　異文化理解“Let's make an original pose of ‘Kendo’”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　久保田　大　貴

１　ねらい

本授業では，以下の３点をねらいとして実践を行った。

・剣道に興味を持つことを通じて伝統的な日本文化を理解する。

・剣道における「構え」の意味と役割を知る。

・理解した剣道の「構え」の意味と役割に基づいてオリジナルの「構え」を考え披露する。

２　概要

⑴　まずは日本のことについて多くを知らないと考えられる現地の児童たちに対して、スライドを用いて日本という国についての簡単な紹介を行う。本授業においては日本がアメリカからは遠く離れたアジア地域にあることや、周囲を海で囲まれた島国であること、そしてアメリカと日本の国全体の大きさの比較などを地図をもとに紹介する。さらに、アメリカにおいても広く知られている日本のアニメや食べ物、「侍」の文化を紹介し、この「侍」の文化への着目を通じて剣道についての授業を行っていくための導入を行う。

⑵　剣道について児童に知ってもらうために、まず最初に私自身が撮影した剣道の試合の動画を児童たちに見せる。その後、国際大会や日本人以外が剣道に取り組んでいる写真を見せ、剣道が現在では国際的に取り組まれている日本の国技であることを伝える。その後、剣道の中でも試合をする２人の選手の「構え」に着目し、「中段の構え」、「上段の構え」、「二刀流の構え」というように剣道における構えの種類について写真を用いて紹介する。その際に、各構えが試合において有利に働く点と不利な点とが存在することを紹介し、各構えにはそれぞれ意味や役割があることを紹介する。

⑶　児童の活動段階では、こちらが用意した新聞紙で作られた模擬竹刀を児童に配布し実際にオリジナルの構えを学習した意味や役割に基づき考えてもらう。その時2人組になり、お互いに実演を交えながら考えてもらう。その後それぞれが考えた構えを5人グループになり利点と不利な点を説明しながら実演してもらう。最後に、剣道の試合が構えにより正確に狙いを定めることにより乱暴な打ち合いではない「正々堂々」の精神がそこには根差しているということを伝える。

３　成果と課題

本実践では、海外でも有名な日本の「侍」の文化に着目し、そこから剣道へと結びつけていったため、児童は剣道というまさに「日本らしい」伝統的な国技に対して大変興味を持ちながら授業に臨んでいたと感じている。実際に模擬竹刀を渡し「構え」の作成活動の際にも刀を使うという行為に対して非常に興味を示していた。日本独自の文化を楽しみながら紹介できたことは本実践の成果であるといえる。課題としては、児童にとっては刀を使うという行為は非日常的な行為であり、さらに海外にはないそのような文化に触れることは皆大変珍しい行為であったようであり、模擬竹刀を渡し活動を始めた途端に学級全体がもはや興奮状態になり統率がとれなくなってしまったことである。児童という発達段階の考慮に乏しかったことと対応策が用意できていなかったことが課題として挙げられる。

【自己の変容】

日本文化という海外の児童にとっては極めて物珍しい文化に触れるため、母語の違いという壁は存在しても、児童は集中して提示した活動に取り組むものと考えていた。しかし実際の活動では学級は刀を使うと言う行為に興奮し統率がとれない状態となったことに関し、この点は日本の児童も海外の児童も同じ「児童（子ども）」なのだということを強く感じた。児童の発達段階に基づく心理や行動などの特性を考慮した上での教育活動という基本を改めて認識することとなった実践であった。

第６学年　異文化理解 “Let’s learn about Japanese ‘Satochi-Satoyama’culture”

教育学研究科　学習科学専攻　カリキュラム開発専修　　中　村　航　平

１　ねらい

本単元を設定したねらいは以下の二つである。一つ目は、私の出身地には里地里山がたくさんあり、ぜひ自分の生まれ育った町の様子を海外の子どもに伝えたいと思ったからである。二つ目は、「持続可能な社会」としての里地里山という概念は国境を越えて重要なテーマであるし、現地の子どもたちにもこの授業を通して地球環境について真剣に考えてほしいと思ったからである。

２　概要

⑴　導入の場面では、国外に出たことのある子どもは少ないと考えたため日本に関する小クイズを行った。

⑵　まず里地里山が表現されている日本の音楽である「ふるさと」に興味を持ってもらうため、当時、日本で流行っていた音楽と比較させながら「ふるさと」を聞かせた。

⑶　里地里山という概念が持っている二つの意味を提示し、それぞれの意味について写真などを通して説明を行った。

⑷　今回の授業のまとめとして、里地里山の文化が分かる「となりのトトロ」を動画で見せる予定であったが、パソコンの調子が悪くできなかった。そのため急遽、里地里山に関する質問コーナーになった。

３　成果と課題

今回、言語のハンディーキャップを補うため主としてパワーポイントを用いて授業を行った。これにより子どもは視覚的な情報を通して学習することができたので、ほとんどの子どもが授業に集中して取り組めていたと思う。しかしその反面、私自身がパワーポイントの画面を注視しており、子どもの様子を見ながら授業をすることができなかった。このようなことから、意識的に子どもの様子を見るように授業前に心がける必要があったと思う。

また渡米する前から英語力に自身がなかったが、そのことについて痛感させられる場面が授業中に多々あった。授業で話す内容はすべて事前に英語の台本を作って、なおかつ考えられる子どもの質問についても予め練ってはいたが、予想とは全く異なる質問が出た時に対応できなかった。不思議なもので、質問に対応できなかったことが数回続くと徐々に自分自身の耳が英語をブロックして何も言葉が入らず、最後の15分くらい（特に用意しておいた「となりのトトロ」が見ることができないということが判明した以後）は、ただ子どもの前に立っていたという記憶はあるが、ほとんど何も覚えていない。このようなことから、かなり詳細に授業を練るということも必要であるが、もう少しリラックスして普段通りに授業をするようにすれば良かったと思う。また私自身の意見や考えを伝えるだけでなく、子どもの意見や考えにもっと耳を傾けることができればよかったと後悔している。

【自己の変容】

授業実践を通して、言葉を中心とした教育のあり方から言葉以外にも目を向けた教育のあり方があるということを知った。もちろん言語を流暢に話すことができるということは授業をするにあたって重要なことであるが、授業以外の外的資源を通しても自分の伝えたいことや相手が言おうとしていることを理解することができる。今回の体験型海外実地研究では、このような視点を獲得できたのが私にとっては大きい。今後、より広い視点から授業を構築することができるように、またこの体験が自身の今後の成長や教育活動の充実に役立てることができるようにしていきたい。

第６学年　異文化理解“What is stereotype ?”

教育学研究科　科学文化教育学専攻　社会認識教育学専修　　小　川　征　児

１　ねらい

本授業のねらいは次の二点である。まず，生徒たちが異文化や個人に対するステレオタイプ的見方について認識することである。次に，それらが持つ個性やよさを尊重し，多様性を重視する姿勢を身につけることである。

２　概要

⑴　まず，導入部分で本授業の中核となる「十人十色」を子どもたちに発音させ，どのような意味なのかを予想させ話しあわせた。何人かに発表させた後に，授業の目的として，本ワードを英語で表現してクラスの新しいスローガンを作ることを伝えた。

⑵　次に，授業の展開部前半において，自作のエピソードとイラスト集を使いながら，異文化に対して自分たちも少しばかりステレオタイプ的見方を持っていることを体験させる活動を行った。

⑶　次に，展開部後半において，ステレオタイプ的見方を持ってしまうと個性や良さが見えなくなってしまうことを，前半部の活動と関連づけながら説明し，ステレオタイプの問題を学習させた。

⑷　最後に，終結部で再度「十人十色」について話しあわせ，スローガンを完成させた。さらに金子みすずの「鳥と鈴と私」の英訳を読ませ，多様性の尊重を強めた。

３　成果と課題

本授業実践の成果は，自分が授業を作る際に，子どもがいかに納得して理解できるかを深く考えることができた点である。２年前の教育実習における自分の授業づくりでは，いかに知識を論理立てて教えるかばかり考えていて，発問を工夫するぐらいのものだった。しかし本授業づくりでは，どのようにステレオタイプ的見方を「体験的」に認識させるかを考えることができた。またパワーポイントやイラスト集を作成・工夫し，「視覚的」に理解させるようにした。今回，子どもの理解の方法を考え，教材を工夫して作成できたことは大きな進歩だと思う。

しかし反省点も多い。まず「聞く」ことに関する英語力の低さ，次に「話す」ことに関する英語力の低さである。前者では，今回予想させる場面や話し合わせる場面が多かったが，その中で子どもが何回も質問してくることがあった。しかし，何をいっているのか聞き取れなかったことがほとんどで，あいまいにして授業を進めてしまった。後者では，自分の説明や発問を担当の教師が説明しなおしてやっと活動する場面が少しあった。また，彼の説明で子どもたちが納得したような返事をしていたこともある。彼がいなければ成立していなかった教室環境を考えれば，もっと話す能力が必要だったことは明白である。

また，子どもたちに「十人十色」の精神が伝わったのか，ということを把握できなかった点が反省点であげられる。確かに，子どもたちに「十人十色の精神を大事にしようね」といった時には皆返事をしてくれた。しかし，これはいわば価値観の押し付けであり，子どもたちがどのように考えているかがわからない。ワークシートを活用して子どもたちの理解や気持ちを把握するような，フィードバックをする必要があったと考える。

【自己の変容】

今回の授業実践を通して，子どもたちがどうすれば自分の授業を納得してわかってくれるか考えていろいろ工夫して授業をすることができた。相手がアメリカの子どもだからではなく，これは授業をするうえで教師として必須の能力である。今後，この経験を大事にし，継続的に授業の活動や理解の方法を研究して実践に移していきたい。

第８学年　異文化理解 “Let’s create the emoticon to become the symbol of the peace!!”

教育学研究科　科学文化教育学専攻　社会認識教育学専修　　岩　下　真　也

１　ねらい

私たちが日常的に使用している顔文字は，日本を中心とした東アジア圏で使用されているもので欧米の顔文字とは異なっている。そのことから，日本の顔文字は，日本特有の現代文化であること，また，顔文字は言語の壁を越えて感情を伝えることのできるツールであることに気づき，本単元を設定した。

また，「平和について考える」というテーマの下，平和のシンボルとなる顔文字をつくり，そのワークシートを日本とアメリカの中学校間で交換することで，日米生徒間の国際交流も意図した。

２　概要

⑴　授業開始時に，日本の授業と同じように，全員起立し，全員で「お願いします」とあいさつをした。生徒らは初めて話す日本語に戸惑いつつも，楽しそうに，かつ大きな声であいさつをしてくれた。

⑵　自己紹介の後に，今日の気持ちを顔文字で表現する活動を行った。子どもたちは，アメリカで用いられている顔文字を書くと想定していたが，実際は日本の顔文字に近いものであった。

⑶　日本の顔文字の説明をした上で，日本とアメリカの顔文字を感情別に分ける活動を行った。日本の顔文字はうまく分けることができず，担任であるカーター先生に補助していただきながら活動を行った。その後，日本の顔文字は目で，アメリカの顔文字は口で感情を表していることを説明した。また，顔文字を用いるメリットを説明した。

⑷　ワークシートを配布し，ワークシートの作成にとりかかった。一気にワークシートのすべてを記入させると，教師側の意図が伝わらない可能性があると考えたため，ワークシートを３パートに分け，「説明→記入」を繰り返す形をとった。

⑸　三原中学校の生徒が書いたワークシートを提示し，日本の中学生は「手をつなぐ」「平和のために考える」ことが平和のシンボルになると考える傾向があることを伝えた。最後は，三原中学校の生徒が作成した顔文字と自分たちが作成した顔文字を比較した。

３　成果と課題

本授業の成果は，二点挙げられる。第一に，アメリカの生徒に平和を考える機会を提供することができた点である。「平和の大使」としての役割を多少は果たせたのではないかと考えている。第二に，ワークシートを交換する形をとることで，日本とアメリカの生徒それぞれに新たな平和の視点を与えることができた点である。日本の生徒が作成した顔文字は，「手をつなぐ」「平和を考える」姿が多かったのに対し，アメリカの生徒は「笑顔」「歌う」「踊る」姿を表したものが多かった。

課題は二点挙げられる。第一に，生徒の英語が聞き取れなかったために，うまくコミュニケーションをとることができなかった点である。できるだけ生徒とやりとりすることを心がけてはいたが，なかなかうまくいかず，カーター先生に補助していただく場面が多かった。第二に，スライドショーに話す内容を載せすぎていた点である。途中で話せなくなることを恐れ，ほとんどの内容をスライドショーに載せていたが，そのことが生徒とやりとりする機会を減らしていたように思う。

【自己の変容】

「日本にいれば，英語を話す必要はない」，「できる限り外国人と関わりたくない」と考えていた私にとって，今回の体験型海外教育実地研究は，自らのグローバルマインドを大きく変えるきっかけとなった。それと同時に，英語の重要性を痛感する10日間となった。英語を話すことができれば，自分の知らない世界の多くの人々とつながることができる。英語を学ぶとともに，これからは積極的に外国人と関わっていきたいと考えるようになった。

4　本年度の授業の整理と考察

⑴　本年度の授業

2014年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は，次の通りである。

表１　実施授業の学年と教科等

	学年	教科等，題材・テーマ＊
A	1	異文化理解 Let's feel Cool in Summer!!
B	1	音楽科 What's this sound? – sound in Japan and America? –
C	2	異文化理解 Let's enjoy Japanese festival 'Matsuri'
D	2	異文化理解 Let's play in the suibokuga.
E	3	異文化理解 Let's make "New Holiday in Greenville"
F	3	図画工作科 Let's make Japanese paper lampshade!
G	4	理科 Let's make the toy using water , the "Cartesian diver "
H	4	異文化理解 Let's express with one word!
I	5	異文化理解 Let's play the Japanese KARUTA game !
J	5	異文化理解 Let's make an original pose of "Kendo"
K	6	異文化理解 Let's learn about Japanese "Satochi-Satoyama" culture
L	6	異文化理解 What is Stereotypes?
M	8	異文化理解 Let's create the emoticon to become the symbol of the peace!!

＊「教科等，題材・テーマ」は，参加者（授業者）が付したものであり，授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

⑵　事前の取り組み

参加者は，日本での事前学習会において，授業の目標，内容，教材，学習過程などについて相互に協議・検討し，具体的な準備を進めた。また，英文の指導案を作成し，７月に実施した授業研究ワークショップにおいて，実習校であるエルムハースト小学校のジル・ホワイト先生とエッペス中学校のジュリアン・カーター先生から，教材構成についての助言や児童生徒の実態に基づく助言をいただき，指導計画の改善を図った。授業実施学年については，参加者の希望と指導内容を考慮して調整・決定した。さらに，現地では受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行った上で授業に臨んだ。

⑶　授業についての考察

本年度の授業について，主な成果と課題を以下に示す。

①　教材開発の状況と傾向

参加者は，各自の問題意識や専門領域の特性を生かし，緑のカーテン，音のカルタ，祭り，水墨画，祝日，和紙ランプシェード，浮沈子，漢字，カルタ，剣道，里地里山，十人十色，顔文字，を素材として，新たな教材の開発を行った。既有の教材の解釈ではなく，自ら新たな教材を考案・構成した経験は，参加者の教材開発力の育成に資するものであったと考える。

開発された教材を，異文化理解に資する機能を視点として見ると，以下のように分類・整理することができる。（括弧内の記号は，表１の授業Ａ～Ｍとの対応を示している。）

・日本の伝統文化や現代文化についての理解を促す教材（A, B, C, D, E, F, G, H, I, J, K, L, M）
・日米さらには諸外国の文化の比較を促す教材（B, C, E, M）
・日米の児童生徒の願いやものの見方・考え方の比較・交流を促す教材（C, H）
・既存の文化をもとにして，児童生徒の創造的・主体的な思考･表現活動を引き出す教材（B, D, E, F, G, H, I, J, M）

本年度の教材の特徴としては，日本の文化の理解を促すことに留まらず，既存の文化をもとにして，児童生徒の創造的・主体的な思考・表現活動を引き出す教材が多く開発されたことにある。その一方で，日米の児童生徒の願いやものの見方・考え方の比較・交流を促す教材の開発は少なかった。他者理解に基づくグローバルマインド育成の視点から，今後，日米両国間の，また諸外国間の児童生徒のものの見方・考え方の交流を可能とする教材の開発が増えることを期待したい。

②　学習指導の成果と課題

日本国内での事前の学習会における指導案検討やワークショップ及び米国における実習校の先生方からの助言をもとに，参加者は，授業実施の対象となる児童生徒の発達段階や文化的背景，授業時間，自己の言語能力等を考慮して，授業の目標，内容，方法を焦点化・明確化して授業に臨んだ。授業の目標，内容，方法の焦点化・明確化は，本時の目標を達成するための基盤となるものであり，教師としての実践的指導力の向上に資するものであると考える。

具体的な授業の構成・展開においては，現実の事物事象の提示，ICT を活用した視覚情報・聴覚情報の提供，実体験や疑似体験を重視した活動の設定，創作活動の設定，遊びを取り入れた活動の設定等，多くの工夫を施している。これらの工夫が，異文化に対する興味・関心の喚起，実感を伴う理解，多様で創造的な思考・表現を可能にしている。これらの授業の構成・展開上の工夫の多くは，参加者の言語（英語）による表現を補うための工夫として考案されたものであるが，日本国内における授業においても，児童生徒の学習内容の理解を一層深めるための有効な手だてとなるものであり，参加者の実践的指導力の向上につながっていると考える。

今後の課題として，本時の目標に到達した児童生徒の具体的な姿を評価規準・基準として明確に示すことができなかった点を指摘することができる。期待する児童生徒の姿を明確にし，それを引き出したりそれに近づいたりするための学習指導の内容や方法について検討を行うことができるようになることを希望したい。

⑷　参加者の「自己の変容」についての考察

前章に掲げた参加者による「自己の変容」の記述内容を分類・整理すると，主に以下の３点にまとめることができる。

①グローバルマインド及びコミュニケーションに対する認識の変容
②授業に対する認識の変容
③文化に対する認識の変容

以下に，それぞれの具体的な記述（全参加者の記述について一部分を抜粋したもの）を示す。

①グローバルマインド及びコミュニケーションに対する認識の変容

・グローバルマインドは，なにも海外でだけ必要な心構えではない。相手の言っていることが聞き取れなければただ素直に聞き返すことであり，まずは相手をしっかりと見て，かかわろうとすることである。それは，誰に対しても実践できることである。
・「日本にいれば，英語を話す必要はない」，「できる限り外国人と関わりたくない」と考えていた私にとって，今回の体験型海外教育実地研究は，自らのグローバルマインドを大きく変えるきっかけとなった。（中略）英語を学ぶとともに，これからは積極的に外国人と関わっていきたい。
・はっきり自分自身の意見や考えを示すことの重要性を，体験を通して感じることができ，私自身の自己表現や日本人の自己表現を見直すきっかけとなった。
・伝えようとする意識を高く持って，言語だけでなく，非言語でも相手に伝えていく姿勢がコミュニケーションを生む。
・「相手が伝えようとしてくれていることを自分の力で理解したい」「自分の思いをできる限り伝えたい」という思いが強くなった。
・アメリカにおいては伝わらないことが普通という意識でいたため，何とかして伝えようと色々な手法で何度もトライすることができた。その経験から，自分なりの表現で人と繋がろうとする姿勢が身についた。
・お互いの意思疎通を図るためにお互いの言語を知ることはもちろん重要であるが，相手を尊重する態度と，伝えたいと思う側に相手が聞きたいと思う内容があれば，話を聞こうとしたり理解しようとしたりするものだということを実感した。

②授業に対する認識の変容

・授業を行わせていただいた中で改めて感じたことは，準備の大切さについてである。パソコンやパワーポイントの動作確認，パワーポイントの中の英語表現に誤りがないか，授業内容のしっかりとしたイメージをもつこと，機器の不具合が起こったときのために二の手，三の手を考えておくことなど，しっかりとした準備をして授業に臨むことができたので，全体的に余裕をもって授業を行うことができた。
・子どもが学習課題に切実性をもって取り組んだり，子どもの深い思考を促したりする学習課題

とアクティビティの設定は重要である。

・児童の発達段階に基づく心理や行動などの特性を考慮した上での教育活動という基本を改めて認識することとなった実践であった。
・授業実践を通して，言葉を中心とした教育のあり方から言葉以外にも目を向けた教育のあり方があるということを知った。
・子どもたちがどうすれば自分の授業を納得してわかってくれるか考えていろいろ工夫して授業をすることができた。相手がアメリカの子どもだからではなく，これは授業をするうえで教師として必須の能力である。
・授業や学校の形態は一つではなく，多様なものであるということを学び，教育観が大きく変わった。（中略）一斉授業に限らない授業形態が見られたのが興味深かった。
・自分自身が子どもたちと共に授業を作っていくことに対してとても楽しめていることを実感することができた。

③文化に対する認識の変容

・授業を考えることを通して，音にも文化が反映されるということを知った。普段何気なく聞いている音でも，それは日本でしか聞けない音なのかもしれないと考えることで，自分にとっても音に対する価値観が変わったように思われる。

これらの参加者一人一人の「自己の変容」の記述は，本実地研究が目標とする「グローバル･パートナーシップを推進するために必要な資質の育成」が実現されつつあることを具体的に示すものであると考える。ここでの肯定的な変容が，さらなる出会いや取組によって引き続き成長していくことを期待している。

5　おわりに

発足から８年目を迎える大学院生による体験型海外教育実地研究は、広島大学大学院教育学研究科・教職高度化プログラムの選択科目として、その位置づけが確定してきており、本年も13名（募集当初は14名）の参加があった。支援教員と現地の協力教員、そして参加院生がまさに三位一体となって、このプロジェクトによる授業構想作成段階から、計画・指導案検討、授業実施、そして事後指導を通して、今年も教育を通した国際交流に大きな成果を残すことができた。

特に、これまでの現地協力校に加えて、GPSCの現地協力教員の好意により、新たにローリー市内の新設中等学校訪問が追加され、アメリカの学校教育の多様な側面について現地体験することができて大変有意義な訪問となった。以下では、今回の研修で得られた成果を概観し、さらに今後に向けた評価と課題について述べたい。

第１に、事前の取り組みから、教材開発と学習指導・評価において、文化を共有しない生徒たちにどのように選んだ題材を理解させるか考えることを通して、日本で同種の教材研究や授業研究を行うよりははるかに相手を深く意識した活動ができたと思われる。参加者各自が、自らの興味・関心、専門性、さらに問題意識をもとに，慣れ親しんだ素材についてどのように伝えるのか、どのように目標に導いていくのか、工夫したことで、参加者の教材開発力の向上につながったことが期待できる。

第２に、参加者の振り返りを通した変容として、コミュニケーション、授業、文化に対する視点がさらに多様化し、複眼的になったことが見受けられる。本プロジェクトの最終的な目標は、未来のグローバル化社会における学校教育に資する人材育成である。同じものを見たとき、共有部分の多い相手だけでなく、共有部分の少ない相手とコミュニケーションを行うことができるのは、近未来に予想される多様化する日本社会での教職に就く者にとっても、大きな意義のあることであろう。

最後に、来年度に向けた課題について押さえておきたい。毎年、新たな興味深いテーマが出され、生徒との交流をねらった相互作用型の授業が提案されていることは望ましいことである。しかしながら、教材を生徒に与えるだけでなく、生徒がどのような順序で何をすればいいのか、指示が明確でないのでせっかくの素材のおもしろさが十分に伝わらない場面が見られた。日本の児童・生徒の教室内学習行動は規則的であるのに対して、異文化状況においてはそうとは限らない。教師の思いをいちいちどのように言葉にして指示をするのか、できたことをどのようにフィードバックして他の生徒に伝えるのか、しかもそれを気持ちを込めて英語で行うことにも協力教員の支援を得ながらより習熟していく必要があるであろう。また、日米の教員は、教育という共通の課題に対処する

ために相互に影響し合うパートナーである。受け身的に相手から学び取るだけでなく、わからなかった部分を自ら積極的に尋ねたり、自らの経験や考えを相手に伝えたりすることを通して、理解がさらに深くなることが期待できる。教師として持つべき教科専門分野の知識を広げるだけでなく、それをどのように伝えることができるのか、教室内コミュニケーション・モデルの学習機会としても、この体験型海外教育実地研究を活用してもらいたい。

〔参考文献〕

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻，2007，pp.43-56。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻，2008，pp.39-53。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻，2010，pp.95-104。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻，2011，pp.155-168。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻，2012，pp.129-140。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻，2013，pp.259-269。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」，広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻，2014，pp.161-181。